

1. 件名：「大間原子力発電所の地震等に係る新基準適合性審査に関する事業者
ヒアリング（８８）」

2. 日時：令和２年９月２８日（月）１５時３０分～１６時３５分

3. 場所：原子力規制庁９階耐震会議室

4. 出席者

原子力規制庁：小山田安全規制調整官、佐藤主任安全審査官、中村主任安全
審査官、永井主任安全審査官、磯田係員

電源開発株式会社：原子力技術部 部長 他１１名

（テレビ会議システムによる出席）

5. 要旨

（１）電源開発株式会社（以下、「電源開発」という。）から、平成２６年１２月
１６日に申請のあった大間原子力発電所の設置変更許可申請のうち、地
下構造の評価に関するコメント回答について説明があった。

（２）原子力規制庁から、説明内容に対し、以下の点について確認した。

①（P. 3-24）地盤造成状況に関する図上の表現について

②（P. 3-25）低周波数帯から卓越振動数が漸増している部分（No. 7, 18 以
外）の要因について

③（P. 5-7）三次元から切り出した一次元地下構造モデルの考え方につい
て

④（補足説明資料 P. 5-37）吉田（2005）に基づき一体モデル及び分割モデル
を用いて計算した応答スペクトルの長周期側で一体モデルと分割モデ
ルにおけるピークの差の考え方について

(3) 電源開発株式会社から、確認事項に対し、以下の回答があった。

- ① 基準化スペクトルの高振動数側が持ち上がる傾向が顕著な観測点は敷地南側に位置し、それらの観測点は表土（第四系または盛土）の厚さが約3m～約6mであり、現地形の第四系の上に盛土を行った箇所もしくは現地形からの改変が小さく第四系が比較的厚い箇所である。P. 3-24の図中には、高振動数側が持ち上がる傾向が顕著な観測点とその傾向が顕著ではない観測点を識別できるように示しているが、見にくいところもあるので、表示方法については工夫をする。
- ② No. 7, 18 以外の観測点について、低周波数帯から卓越振動数が漸増しているとは考えていない。表土（第四系または盛土）の層厚及びS波速度から推定した卓越振動数は5～10Hzであり、この帯域は基準化スペクトルの高振動数側が持ち上がる傾向の見られる振動数帯に対応している。
- ③ 原子炉建屋設置位置における解放基盤表面（T.P. -260m）と、鉛直アレイ地震観測地点における基盤の地震動を評価する位置の地震基盤からの増幅特性が整合的であることについて、地下構造モデルを用いて確認している。原子炉建屋設置位置付近の深部地下構造モデルは、三次元地下構造モデルから切り出した原子炉建屋設置位置の一次元地下構造モデルとしている。なお、三次元地下構造モデルは、重力探査、屈折法地震探査、微動アレイ観測及びPS検層データに基づき、ジョイントインバージョン解析により作成している
- ④ 応答スペクトル図において長周期側で一体モデルと分割モデルによる違いが見られるが、重要施設の主要周期帯となる短周期では、建屋基礎下における応答スペクトルの差は小さいので、特段影響はないと考えている。

6. 提出資料

- ・大間原子力発電所 審査会合における指摘事項について（地震・津波関係）
- ・大間原子力発電所 地下構造の評価について（コメント回答 その2）
- ・大間原子力発電所 地下構造の評価について（コメント回答 その2）（補

足説明資料)

- ・大間原子力発電所 地下構造の評価について(コメント回答 その2)(地震観測記録データ集)